

大窪詩仏『二島遊草』：解題、翻刻と注釈（上）

王，自強
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7325711>

出版情報：文献探究. 61, pp.27-39, 2023-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



大窪詩仏『二島遊草』——解題、翻刻と注釈（上）——

■解題

大窪詩仏（一七六七—一八三七）、名は行、字は天民。近世後期の漢学者山本北山と市河寛斎にそれぞれ儒学や漢詩文を学んで、師の死後、化政・天保期頃の江戸詩壇において牛耳を執る漢詩人となった。地方遊歴を好んだ詩仏は、文政二年から天保二年までの十二年間、『西遊詩草』（二巻二冊、文政二年刊）、『北遊詩草』（二巻二冊、同五年刊）、『再北遊詩草』（二巻二冊、同八年刊）、『二島遊草』（一卷一冊、天保二年刊）の四つの紀行詩集を出版した。しかし、これらの紀行詩に関する研究はほとんど見られない。

文政年間の三つの詩集が、いずれも楷書で印刷されていたのに対して、天保年間の『二島遊草』は草書で刊行されたものである。また、富士川英郎氏が編纂した『紀行日本漢詩』には、その三つの楷書体の詩集の影印が収録されているが、草書体の『二島遊草』は収められていない。本詩集は、国文学研究資料館の「国書データベース」によれば、国立国会図書館本、国文学研究資料館本、宮城県図書館本、東京藝術大学本と慶應義塾大学本の五つしか確認できない。よって、草書で書かれた伝本が少ない『二島遊草』を翻刻・紹介する必要がある

と考えられる。

ここに翻刻する『二島遊草』は、詩仏が松島と秋田の雄鹿島を詠じたものである。本詩集は、「松島遊草」の十二首と「雄鹿島遊草」の六首および、仙台藩の画人菅井梅閑の五葉の文人画を収録している。また、それらの漢詩と文人画はすべて陰刻である。とくに、本詩集の漢詩の草書は、詩仏がみづから書いたものであるから、『二島遊草』は紀行詩集だけではなく、詩仏の晩年の書道作品集でもある。

また、本詩集の出版と潤筆料について、一つだけ付言する。本詩集の挿絵を描いた菅井梅閑は、菊坪なる人物に宛てた書簡に、

一 昨年十月秋田より天民老人松島見物ニ仙台へ参り小生即案内仕、詩数首相出、秋田雄鹿の詩と小生少々画入ニ而『二島遊草』と申、仙台ニ而上木仕候。（中略）黄物は百両から取申候。六人ニ而逗留之諸雜用ヲ引、仙台ニ而品物ヲ如許七十両ほど持帰申候。当地ニ而ハ近來之当りニ御座候。

と述べている（注¹）。一昨年は天保二年。この書簡を見れば、詩仏らは『二島遊草』の出版で百両の金をもらったことが分かる。百両の金は現在の金額に換算すれば、一千万円ほどになる（注²）。このように、文学作品集『二島遊草』の出版は、詩仏の漢詩人としての生活手段の一

王 自 強

つであつた。

近世後期の詩壇と遊歴について、揖斐高氏は「文人たちの遊歴という生活形態は、詩・書・画などの文雅風流が儒学から分離し、それらを生計の手段とする職業文人が一つの階層として成立した十八世紀後半以後に一般化し始めた」と指摘している^(注3)。詩仏の紀行詩集と書道作品集としての『二島遊草』は、仙台四大画家と言われた梅関の文人画を収録し、当時詩壇の詩・書・画という文雅風流を融合したものであろう。

以上のように、本詩集はこれまでに研究の俎上に載せられなかった詩仏の紀行詩を研究する際の重要な資料であり、近世後期の詩壇における文人の遊歴や詩・書・画の融合などを究明するための有用なものだと考えられる。そこで本稿では、この詩集の陰刻の画像を掲げて詩仏の書道作品を見ながら、翻字本文の後に漢詩の書き下し文・語釈・大意・補説を付して詩仏の紀行詩を考察したい。

■底本書誌

- ・所蔵 国文学研究資料館日本漢詩文集コレクション（中村真一郎氏旧蔵）、請求記号…87-221。
- ・巻冊 一卷一冊。
- ・書型 大本。縦二七・五糎×横一九・一糎。
- ・刊写 刊。
- ・題簽 左上「二島遊草」、刷題簽。
- ・見返し 「天保二年辛卯新鐫／天民先生草書／二島遊草／書肆

・序文

〈江戸／僊臺〉・〈千鍾房／金花堂／流輝軒〉。
序末に「天保辛卯仲冬三日／南山老人題」。

・内題

なし。

・尾題

なし。

・柱記

なし。

・跋文

跋文一の末に「辛卯十一月十七日常陸逸士宮本鉉識／仙臺 山岸玉振書」。跋文二の末に「冬至後三日児謙書於仙臺客舍」。跋文三の末に「天保辛卯南至後三日秋田錦江石井驥書於仙臺逆旅」。

・刊記

「京都 寺町通松原／勝村治右衛門」／大阪 心齋橋筋安堂寺町／秋田屋太右衛門」／江戸 日本橋通壹町目／須原屋茂兵衛」／同 同四丁目／須原屋佐助」／僊臺 国分町十九軒／西村治右衛門」。

・藏書印

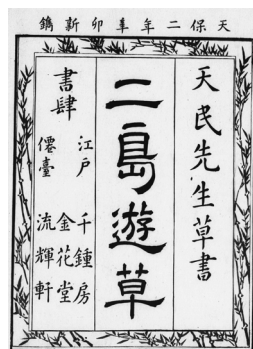
なし。

■凡例

- 一、図版の右側には丁数才と丁数ウを付した。
- 一、漢字は通行のものに改めた。
- 一、不審箇所には右脇に（ママ）を付した。

■翻刻と注釈

見返し



天保二年辛卯新鐫

天民先生草書

二島遊草

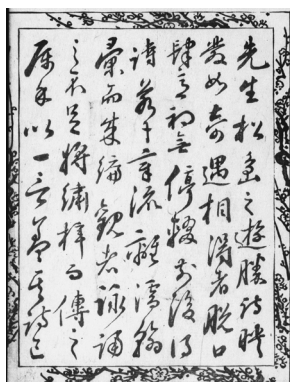
書肆 江戸 千鍾房

仙台 金花堂

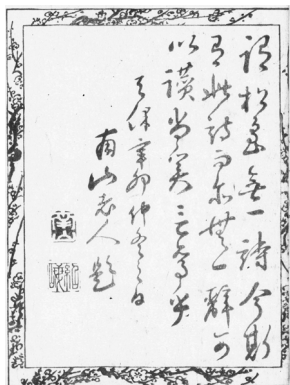
流輝軒

序文

(1才)



(1ウ)



先生松島之遊勝詩、映発如奇遇相得者。脱口肆意、初無停輟。前後得詩、茲十二章。流離濡翰、彙而成編。觀者詠誦之不足、將繡梓而伝之。属余以一言。蓋其詩已謂松島無一詩。今斯有此詩、而亦無一辭可以讚尚美言焉乎。

天保辛卯仲冬三日

南山老人題

南山(印)

紹岷(印)

先生の松島の遊勝詩、映発すること奇遇相ひ得る者の如し。口を脱すれば意を肆にし、初より停輟すること無し。前後詩を得ること、茲に十二章。流離翰を濡らし、彙めて編を成す。觀者之を詠誦すれども足らずして、將に繡梓して之を伝へんとす。余に属するに一言を以てす。蓋し其の詩は已に松島を謂ふに一詩無し。今斯に此の詩有れば、而ち亦た一辭の以て讚尚美言す可きこと無からんや。

天保辛卯仲冬三日

南山老人題す

南山(印)

紹岷(印)

【語釈】

○遊勝詩 紀行詩のこと。○映発 詩歌や文章が互いに引き立てあうこと。○奇遇 偶然に出会うこと。○脱口肆意 自分の感情をそのまま口走るさま。○停輟 書き終えること。○十二章 十二首のこと。○流離濡翰 流離はしたり落ちるさま。濡翰は墨を含んだ筆。陸機「文賦」(『文選』所収)に、「始躑躅於燥吻、終流離於濡翰」(始めは燥吻に躑躅し、終には濡翰に流離す)とある。○繡梓 上梓すること。

○松島無一詩 松島については一つの詩もない。『二島遊草』第十首の七言絶句の結句に、「松島古来無一詩」（松島 古来一詩無し）とある。○天保辛卯仲冬三日 天保二年十一月三日。○南山老人 釈南山。俗姓は笹野、号は南山、法諱は紹岷。仙台瑞鳳寺第十四世住職。宝暦六年（一七五六）生、天保十年十一月八日没。八十四歳。大窪詩仏とともに江戸時代の三十六の漢詩人と称された。

【大意】

詩仏の松島紀行詩は、その表現が引き立てあうこと、偶然出会った風景から感得したもので、口を通して思いのままに詠んだ。詩を詠み始めてから止まることなく、前後に詩を作って、十二首となった。こうした濡れた筆から流れ出すように書き記される紀行詩をあつめて、詩集の一編とした。詩仏の作品を読んだ人は彼の作品を口ずさんでいるが、十分には世に伝わりきっていない。ゆえに、彼の詩集を上梓して世間に広めようとしている。そのため、私に序言を依頼してきた。詩仏の詩において、これまで「松島を詠じる詩は一つもない」と言われていた。いま詩仏の松島詩があり、一言をもって『二島遊草』の詩を称賛すべきだろう。

【補説】

現在、確認される五つの伝本は二つのバージョンがある。その中でも慶應義塾大学本だけは、本稿の底本である国文学研究資料館本などの刊本とはやや異なり、序文が二つある。その一つ目の序文は本稿の底本の序文と同じであるが、二つ目の序文の末に「辛卯皐月 平泉大槻準題／男格書」とある。この序文の撰者は大槻平泉、書写者は平泉の長男大槻習齋（名は清格）。また、序文の年次「辛卯皐月」は天保二年五月。ただし、天保二年五月十三日菊塙宛大窪詩仏書簡（注4）に、

愈御安全珍重奉^{（つづ）}在候。私も秋田迄立歸りて下向仕候。明後十五日出立仕候。扱右に付御願申上候は、竹碑並に石灯笼引取候様先より申被遣候。（後略）

とあるように、天保二年五月に詩仏は秋田にいた。その後、秋田を発つて松島に行つて松島詩を作ったのは、天保二年十一月のことであつた（注5）。したがつて、天保二年五月に大槻平泉が『二島遊草』に収録された「松島遊草」十二首の詩を読んだ可能性はまったくないだろう。

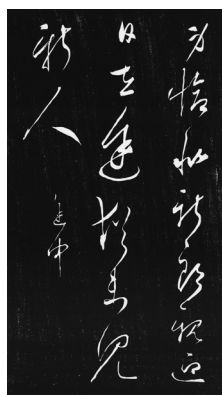
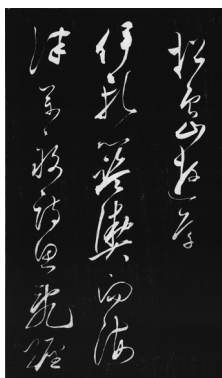
そのため、国文学研究資料館本や国立国会図書館本および東京藝術大学本などは、平泉の序文を収録していないと考えられる。

本文

●第一首

（2才）

（2ウ）



松島遊草

途中

伊軋藍輿向海津
万般詩思乱纏身
恰似新郎親迎日

途中
伊軋^{いあつ}たる藍輿 海津に向かふ
万般の詩思 乱れて身に纏はる
恰も新郎 親迎の日に似たり

在途猶未見新人 途に在るも猶ほ未だ新人を見ず

◆七言絶句。韻字は津・身・人（上平声十一真）。

【語釈】

○途中 松島に行く途中。『詩聖堂詩集三編』（十卷三冊、天保九年刊）所収。詩題は「赴松島途中作」。○伊軋籃輿 伊軋は移動中の駕籠の音。籃輿は竹で編まれた粗末な駕籠。○海洋 海岸のこと。○万般詩思 さまざまな詩興。○新郎 結婚したばかりの男性。○親迎 新郎が自ら新婦の家に出かけて迎えること。○在途 海岸へ行く途中。○新人 新たに結婚した人。多く、新婦をいう。

【大意】

がらがらと音を立てる駕籠に乗って、松島の海岸に向かって行くと、頭の中にはさまざまな詩興が湧いて、乱れてからだに纏わりつく。その時は、まるで新郎が花嫁を迎えに行く日のようだ。とはいえ、海岸に行く途中で、花嫁の姿を見ることはなかった。

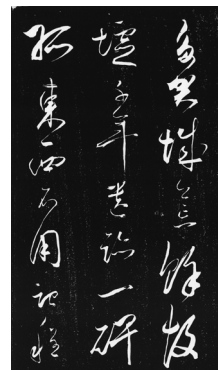
【補説】

市河寛斎編『三家妙絶』（三卷一冊、文化四年（一八〇七）刊）に収録された范石湖の七言絶句「高景山夜帰」に、「伊軋、籃輿、草露間、夜涼月暗走孱顔。忽逢陂水明如鏡、照見沈沈倒景山」（伊軋たる籃輿、草露の間、夜涼しく月暗くして孱顔に走る。忽ち陂水の明らかなること鏡の如きに逢ふ、沈沈たる倒景の山を照見す）とある。本詩の起句は范石湖の詩を踏まえつつ、詠まれたものであろう。

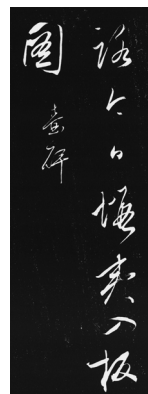
また、本詩では、詩仏自身と松島がそれぞれ新郎と新婦に譬えられている。このように、本詩の後半では、詩仏の松島の風景を見たいと願う気持ちが十分に感じられるだろう。

●第二首

（3才）



（3ウ1行目く2行目）



壺碑

壺碑

多賀城荒余故墟 多賀城荒れて 故墟を余す
千年遺跡一碑孤 千年の遺跡 一碑孤なり
東西不用記程路 東西用ひず 程路を記するを
今日蝦夷入板図 今日 蝦夷 板図に入る

◆七言絶句。韻字は墟・孤・図（上平声六魚・上平声七虞、通韻）。

【語釈】

○壺碑 『詩聖堂詩集三編』（十卷三冊、天保九年刊）所収。詩題は本詩と同じ「壺碑」。○多賀城 宮城県多賀城市市川・浮島にあった古代の城柵。『続日本紀』によれば、多賀城の初見は天平九年（七三七）。○故墟 建物・市街などの荒れはてた跡。○千年遺跡 多賀城の廃墟。○一碑 多賀城碑。宮城県多賀城市大字市川にある石碑。日本三古碑の一つ。天平宝字六年（七六二）に建立。壺碑ともいう。現在、国の重要文化財。○東西 多賀城の東と西。○程路 路程。道程。○蝦夷 古代東北に住んで、中央と異なる生活・文化様式を持った中央政府に服さなかった集団。平安期以前、「えみし」「えびす」と称された。八世紀中頃以後、多賀城を拠点に蝦夷征伐がたびたび行われる。○板図 版図。領土の範囲。

【大意】

多賀城は荒れはてて、昔の城跡が残されている。千年前の遺跡に石碑がひとつそびえる。もはや多賀城の東西の道を覚える必要はない。かつての蝦夷は現在地図に載っているのだから。

【補説】

本詩は紀行詩であり、詠史詩でもある。詠史詩とは、中国前漢に成立した詩体として、過去の歴史上の人物や物事を詠み、自分の感慨を託したものである。本詩では、詩人は荒れはてた多賀城で千年の歴史をもつ壺碑を詠じて、国の領域の変化によってもたらされた交通の利便性を賛美していた。

●第三首

(3ウ3行目)

一燈無雲夕照明

港頭潮漲水無聲
欲探東海神仙窟
來宿蓬萊第一程
仙窟未開而蓬萊

(4才)

(4ウ1行目)

才一燈無雲夕照明

壺竈

壺竈

一点無雲夕照明

一点雲無く

夕照明らかなり

港頭潮漲水無聲

港頭潮漲りて 水に声無し

欲探東海神仙窟

東海の神仙窟を探らんと欲し

來宿蓬萊第一程

來たりて宿す 蓬萊の第一程

◆七言絶句。韻字は明・声・程（下平声八庚）。

【語釈】

○壺竈 『詩聖堂詩集三編』（十卷三冊、天保九年刊）所収。詩題は「宿壺竈」。壺竈は現壺竈市および東方に開ける壺竈湾一帯。地名は奥州一宮壺竈神社に由来する。江戸後期、松島湾口の寒風沢島が外航船の仲継港として繁栄した。○夕照 夕陽の光。○港頭 壺竈港の出入り口のあたり。○水無聲 海水の音がしない穏やかな海面のさまをいう。「与橋平」は候補案。『詩聖堂詩集三編』では「水無聲」を「与橋平」に改めている。○東海 東方の海。そもそも東中国海を意味するが、ここで壺竈のあたりの海を指す。○神仙窟 仙人が住んでいるところ。伝説上の場所。○蓬萊 古代東中国海にある仙境の一つ。神仙思想で説かれるもの。本詩では、壺竈の喩え。○第一程 最初の道程。

【大意】

雲一つない空に、夕日が照り付けている。壺竈港の潮位が上がってきたが、水の音はしない。東海の神仙窟を探そうとして、最初の道程たる壺竈に宿る。

【補説】

松島を詠んだときに「蓬萊」の語を使う例は、徂徠の松島詩（『徂徠集』巻六所収）にも見られる。

右謝自製松島図

右に自製の松島図を謝す

七十二嶼吮毫遲

七十二嶼 毫を吮ふこと遅し

一一生雲色逼幃 一々雲を生じ 色は幃に逼る

総訝蓬萊堪写贈 総べて訝る 蓬萊を写し贈るに堪ふることを

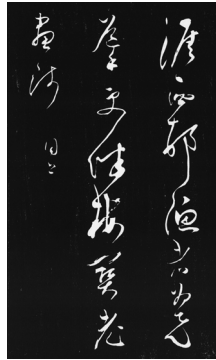
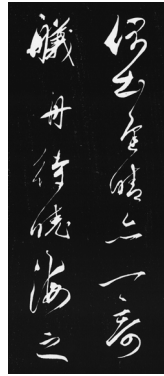
不知瀛海是盆地 知らず 瀛海はれ盆地たるを

この詩は松島図を見て作られた題面詩であり、詩仏の松島詩と同じく「蓬萊」の詩語を用いたが、現地で松島を詠じる詩仏の詩とは質が異なるだろう。詩仏の詩の前半は、塩竈港の風景をそのまま詠じた写実的なものだと言える。ただし、徂徠の詩に詠まれた松島の風景は、あくまでも松島図によつて連想されたものであると考えられる。

●第四首

(4ウ2行目〜3行目)

(5才)



同上

上に同じ

偶たま出で島晴るるも亦た一奇なり

艤舟待曉海之涯 舟を艤^{よそ}ひて暁を待つ 海の涯

西村漁者為先導 西村の漁者 先導と為す

更伴梅関老画師 更に伴ふ 梅関の老画師

◆七言絶句。韻字は奇・涯・師(上平声四支)。

【語釈】

○同上 第三首の詩と同じ。『詩聖堂詩集三編』(十卷三冊、天保九年

刊)所収。○偶出 偶に出かけること。『詩聖堂詩集三編』卷五に「出

遇」とある。○島晴 島が晴れること。『詩聖堂詩集三編』卷五に「新

晴」とある。○艤舟 船出の用意をすること。○海之涯 海のきわみ。

天涯海角の四字熟語がある。○漁者 漁師。漁業に従事する人。○先

導 先に立つて導くこと。案内人。○梅関 菅井梅関の号。江戸後期

の文人画家。名は岳・智義、字は岳輔・正卿。はじめ東斎と号し、の

ち梅関に改めた。菊田伊洲・東東洋・小池曲江とともに仙台四大画家。

天明四年(一七八四)十月二十七日生、天保十五年(一八四四)一月

十一日没。六十一歳。『二島遊草』には、梅関が画いた「松島扇溪」「松

島坐禅窟」「雄鹿島貂岬」の挿絵が見える。

【大意】

たまに出かけて島の天氣が晴れるのは、珍しいことである。舟を用
意し、海の果てへ行く暁を待つ。西村の漁師を案内人として、更に老
画師の梅関を連れ立つて行く。

【補説】

菅井梅関の松島図について、江戸後期の蘭学者佐々木中沢は『迎春
館遺稿』の漢文「梅関山人行実」に、

松島図作者數十人。佐洞巖贈物徂徠者尤著、而不免所謂匠氣。谷
文晁較得其彷彿、山人未当意也。嘗寓富山三旬、製一図。巧思奇
構、尽摹其繡峙綺錯之妙。吾友舟万年熟松島景物、称前無人、著
松島志数卷、以山人所作爲第一。(中略)甲辰夏四月、佐々木知芳
草於秋保温泉之客舍。

(松島図を作るは数十人なり。佐洞巖の物徂徠に贈るは尤も著し
くして、所謂匠氣を免れず。谷文晁、較^ほぼ其の彷彿たるを得、山

人、未だ意に当らざるなり。嘗て富山に寓ること三旬、一図を製す。巧思奇構、其の繡峙綺錯の妙を摹し尽くす。吾が友舟万年、松島の景物に熟し、前に人無しと称して、『松島志』数巻を著して、山人の作る所を以て第一と為す。〔中略〕甲辰夏四月、佐々木知芳、秋保温泉の客舎に草す。

と述べている〔注6〕。ここに言及される佐洞巖は江戸中期の書画家佐久間洞巖、舟万年は江戸後期の儒学者舟山万年。佐々木中沢は、まず洞巖や谷文晁と梅関の松島図の特徴を比較した上で、梅関の実力が一番高いと指摘した。また、彼は舟山万年の『松島志』を引き、改めて梅関の実力を称賛していた。

また、詩仏の松島紀行と梅関について、森銑三は「菅井梅関」の中で、明治の漢詩人館森袖海の漢文「菅井岳伝」を引用して、次のように書き下し文を書いている〔注7〕。

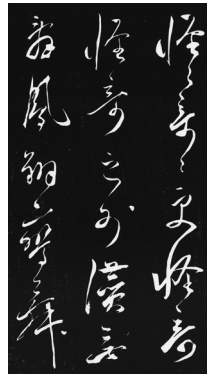
時人星巖の詩、山陽の文を以て岳の画に并せて、称して天下の三絶と為し、敢へて之を優劣するなし。其の江戸に抵るや、大窪詩仏、菊池五山、市河米庵、巻菱湖、愛慕すること欣欣焉たり。詩仏、五山と菱湖とに謀りて、書画会を開きて、得る所の者を挙げて、之を贈る。岳同友を挈げて狭邪の游を為す。一擲皆尽く。詩仏又書画会を設けて、為めに帰装を助く。後ち詩仏の仙台に遊ぶや、岳其の徒を率ゐて、誠を竭して接遇す。而して書を求むる者踵して至り、揮洒虚日無しと云ふ。（傍線筆者）

岳は菅井梅関の名。当時梅関の画は、梁川星巖の詩や頼山陽の文と併称されており、大きな名声を博した。梅関は江戸に滞在したとき、大窪詩仏・菊池五山らとともに、書画会を開催したり遊廓に遊んだり

していた。また、後年梅関は恩返し の形で、仙台に旅行する詩仏を招待した。この漢文の傍線部に記されたことは、本詩の後半の主旨と一致しているのである。

●第五首

（5ウ）



（6才1行目〜2行目）



松島

松島

怪怪奇奇更怪奇

怪怪奇奇 更に怪奇たり

怪奇之外讚無辞

怪奇の外 讚するに辞無し

鳳翔鸞舞松同態

鳳翔鸞舞 松は態を同じうし

虎踞竜蟠石異姿

虎踞竜蟠 石は姿を異にす

◆七言絶句。韻字は奇・辞・姿（上平声四支）。

【語釈】

○松島 宮城県中部、松島湾の湾岸と湾内二六〇余の島々から成る景勝地。『詩聖堂詩集三編』（十卷三冊、天保九年刊）所収。詩題は「松島舟中」。○怪怪奇奇 普通とは異なつて、怪しく不思議なこと。○鳳翔鸞舞 四字熟語「鸞翔鳳集」とほぼ同じ意味。鳳と鸞が飛んで集まっていること。鳳は鳳凰、鸞は鳳凰に似た五色の鳥。両者は伝説上の霊鳥であり、才能をもつ優秀な人物に譬えられる言葉。ここでは、松の姿の素晴らしさを譬える。○虎踞竜蟠 四字熟語「竜蟠虎踞」と同

じ意味。竜がとぐろを巻き、虎がうずくまるように、ある場所を根拠地として威勢を振るうこと。ここでは、この熟語をもって、石の様子を分かりやすく説明する。

【大意】

松島の風景はなんと珍しいことか。「怪奇」以外の語をもって松島を称賛することはできない。松島の松は、鳳凰が飛翔して鸞が舞うようなかたちをしており、松島の石は竜がとぐろを巻いて虎がうずくまるような姿をしている。

【補説】

本詩の前半は、「怪奇」の語を繰り返して使用している。文化五年に大窪詩仏らが訓点を施した『楊誠齋詩鈔』に、「二者相遭鬼面、怪奇、真善幻」（二者相ひ遭ふ 鬼面、怪奇、真に善く幻し）とある。中国南宋の大詩人楊誠齋の詩に使われた「怪奇奇奇」の語は、本詩の表現とまったく同じである。詩仏と楊誠齋との関係について、詩仏の養子謙は『二島遊草』の跋文で次のように述べている。

家君常謂、「凡遇難遇之景、言難言之景、非做誠齋体、不能尽為」。

〔中略〕松島之景、予所欲言、家君已尽之。或疑其詩之奇險、蓋不知詩者也。（傍点筆者）

（家君常に謂く、「凡そ遇ひがたきの景に遇ひ、言ひがたきの景を言はば、誠齋体^{（一）}に倣ふに非ざれば尽し為すこと能はず」と。〔中略〕松島の景、予言はんと欲する所、家君已に之を尽くす。或は其の詩の奇險を疑ふは、蓋し詩を知らざる者なり。）」

ここである「誠齋体」は楊誠齋の詩風を指す。詩仏は、珍しいかつ言葉で描きにくい風景を見るならば、「誠齋体」に倣わなければならないと主張している。よって、本詩の「怪奇」の表現は、楊誠齋から学

んだものであろう。

●第六首

（6才3行目）

（7才1行目）

二

人云八百八松島

棋布星羅金碧堆

不是神龍戴山去

雲虛蜃氣吐樓來

二

人云ふ

八百八の松島ありと

棋布星羅

金碧の堆

是れ 神龍の山を戴いて去るにあらず

雲虚蜃気 楼を吐いて来たる

◆七言絶句。韻字は堆・来（上平声十灰、踏落し）。

【語釈】

○二 第五首の詩の其の二。『詩聖堂詩集三編』（十卷三冊、天保九年刊）未収録。○八百八松島 宮城県北東部の松島湾内外にある約二百六十の島のこと。八百八は物の数が多いことをいう語。○棋布星羅 四字熟語「星羅棋布」と同じ意味。多くのものが並んだり、散らばったりしているさま。棋布は碁石のように並ぶこと。星羅は星のように連なること。○金碧堆 金色と青緑色の島が集まること。○神龍 靈龜。

鼈は大きな亀。○**神鼈戴山** 『列子・湯問篇』に、渤海の東、鼈の背に神仙が住む海中の五山を載せるという話がある。この五山は岱輿・員嶠・方壺・瀛州・蓬萊。○**蜃気吐楼** 蜃気楼は昔の中国で、蜃（大ハマグリ）が気を吐いて楼閣を描くと考えて名づけられたもの。

【大意】

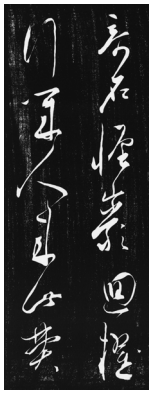
人が言う。「松島湾には八百八の島がある」と。それらの島は基石と星のように並んでおり、黄金と碧玉が積み重なっているかのようだ。松島の風景は、霊亀が背中に乗せて移動してきたのではなく、大ハマグリが気を吐いて楼閣を描いているのだ。

【補説】

寛政九年（一七九七）、江戸後期の医者橋南谿が刊行した『東西遊記・東遊記続編』（五巻五冊）に、「此寺（富春山大仰寺、筆者注）の書院の庭より東南の方を見れば、松島の全景一望の中に備る。大抵東西式三里に南北六七里計りとも見えて、八百八島連れる風景、絵に書ける西湖の図に甚だ似たり」と記されている。このように、寛政頃にはすでに「八百八島」の言い方は存在していた。

●第七首

（7才2行目〜3行目）



三

三

（7ウ）



奇石怪巖廻權行 奇石怪巖 權を廻らせて行く

筆人來此費吟思 筆人此に來たりて 吟思を費やす

猶如走馬燈中影 猶ほ走馬燈中の影の如し

一島纔過一島生 一島を纔かに過ぐれば 一島を生ず

◆七言絶句。韻字は行・生（下平声八庚）。

【語釈】

○三 第五首の詩の其の三。『詩聖堂詩集三編』（十卷三冊、天保九年刊）未収録。○**奇石怪巖** 珍しい形をした岩。○**筆人** 筆を使う人。

詩文を職業とする人。○**吟思** 詩歌などを吟じて、その趣をあげわうこと。ただし、ここで押韻していないのは不審。「思」の右側の「評」

は候補案。「評」の方が韻字としては正しい。○**走馬燈** 回り灯籠。中国から伝来したもの。江戸中期に登場した夏の夜の娯楽。風車や炎に

よる空氣の対流作用で回る影絵の紙灯籠。

【大意】

目の前の珍しい岩を見ながら、權を使って舟を進ませていく。詩人は松島にやって来て、詩を吟味している。多くの島々はまるで回り灯籠の影のようだ。一つの島をようやく通り過ぎたと思えば、また新しい島が見えてきた。

【補説】

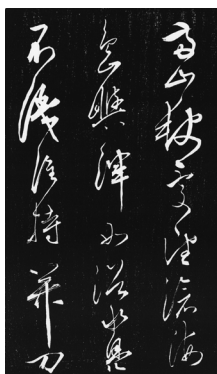
伊藤東涯が編んだ『名物六帖』（正徳四年（一七一四）序）に「正月上日、作燈市。採松葉結棚、于通衢下綴華燈、有諸品。其懸紙人馬於中、以火運之、曰走馬燈」（正月上日、燈市を作る。松葉を採りて通衢に棚を結び、下に華燈を綴りて諸品あり。其の紙の人馬を懸り、中に火を以て之を運らす。走馬燈と曰ふ）とある。以上のように、走馬燈

は夏の夜の娯楽の一つであり、正月の飾り物でもある。

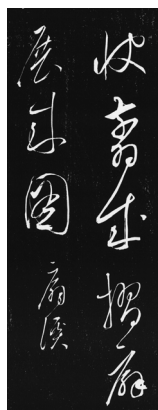
また、詩仏と親交があつた梁川星巖らが校注した『三家詠物詩』（清・賀光烈原選、一卷一冊、文政八年刊）に、元代の詩人謝宗可の七言律詩「走馬燈」が収録されている。

●第八首

（8才）



（8ウ1行目く2行目）



扇溪

扇溪

雨山缺処望滄海

雨山の缺処

滄海を望めば

島嶼渾如浴水鳧

島嶼

渾て水を浴ぶる鳧の如し

不識誰持并刀快

識らず

誰か并刀の快きを持ちて

剪成摺扇展來図

剪りて摺扇と成し図を展べ來たるを

◆七言絶句。韻字は鳧、図（上平声七虞、踏落し）。

【語釈】

○扇溪 松島湾の入り江が扇の形に見られる名勝地。松島四大観の一つ。『詩聖堂詩集三編』（十卷三冊、天保九年刊）所収。○雨山 松島

湾のあたりの山。○缺処 切り立ったところ。○滄海 松島湾のこと。

○島嶼 松島湾にある約二百六十の島。○鳧 島に譬えられる語。○

并刀 并州製のはさみ。并州の名物。并州は現中国山西省太原市。○

摺扇 折り畳むことができる扇。檜扇と蝙蝠扇の二種類がある。

【大意】

雨山の切り立ったところで松島湾を眺めると、島々はまるで水を浴びる鴨のように青々としている。知らなかった。誰が并州の鋭いはさみで、入り江を切り出して、摺扇の形の名勝地を作ったのかを。

【補説】

鈴木省三は『解説塩松勝譜』の「解題」の中で、江戸後期の紀行詩文集『塩松勝譜』（舟山万年著、一卷一冊、文政五年（一八二二）成）に書かれた「松島の四大観」について、「（舟山万年、筆者注）親ら八百余洲を實踐し、一々之を記し且図して、全部二十一巻となせり。而して松島の四大観を定む。曰く、扇溪の幽観。曰く、富山の麗観。曰く、大高峰の雄観。曰く、多門山の偉観。是なり。蓋万年此大著述をなすに当り。塩松間を歴観する前後百回に及ぶといふ。其志の厚き実に塩松の真知己といふべし」とまとめている（注）。本詩に詠まれる扇溪は、その一つである。

つぎに、摺扇について説明する。摺扇は折り畳む扇で、檜扇と蝙蝠扇の二種類に分けられている。『宋史』『日本伝』においては、「其本国永延二年歲次戊子二月八日、実端拱元年也。又別啓貢仏経（中略）納檜扇二十枚、蝙蝠扇二枚」（其の本国の永延二年歲次戊子二月八日、実に端拱元年なり。又た別啓もて仏経を貢し（中略）檜扇二十枚、蝙蝠扇二枚を納む）という記述が見られる。平安時代の永延二年（九八八）、中国の皇帝に日本の特産品である檜扇と蝙蝠扇が献上された。このように見ると、摺扇は平安時代にはすでに作られていたことが分かる。

一方で、『和漢三才図会』巻二十六「扇」の項目に、「五雜俎云、元以前多用团扇、絹素為之、未有摺者。大明始用摺扇、出入懷袖、殊便」

『五雜俎』に云く、「元の以前、多く団扇を用ひ、絹素を之と為し、未だ摺むもの有らず。大明より始めて摺扇を用ひ、懷袖に出入して、殊に便なり」とと記されている。中国においては、摺扇は明代になつてから使われはじめたのである。

●第九首

(8ウ3行目)

(9才)

富山 富山

富山 富山

(9ウ1行目)

富山 富山

富山

富山

剗崖削石路纔通 崖を剗^{えぐ}り石を削りて 路纔かに通る

密樹林中古梵宮 密樹の林中 古梵宮あり

喚作富山豈山富 富山と喚び作すも 豈に山の富むことあらんや

千松島在一眸中 千松島在り 一眸の中

◆七言絶句。韻字は通・宮・中(上平声一東)。

【語釈】

○富山 宮城県宮城郡松島町にある丘。松島四大観の一つ。『詩聖堂詩

集三編』(十卷三冊、天保九年刊)所収。詩題は本詩と同じ「富山」。

○梵宮 仏教の寺院。○千松島 松島湾の名所。渡月橋で陸と繋がっている。雄島・小島・御島とも書く。

【大意】

崖をえぐり石を削って、ようやつと道が開かれ、木が生い茂る林の中に昔のお寺がある。この山は富山と呼ばれるものの、どうして山が裕福だなんてことがあろうか。さてこの富山から松島湾を眺めると、雄島の風景が目に入った。

【補説】

松尾芭蕉は『おくのほそ道』に、

雄嶋が磯は地つゞきて、海に成出たる嶋也。雲居禪師の別室の跡、坐禅石など有。将松の木陰に世をいとふ人も稀く見え侍りて、落ぼ・松笠など打煙たる草の庵閑に住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海に移りて、昼のながめ又あらたむ。江上に帰りて宿を求めば、窓を開二階を作て、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

と書いている(注9)。ここの「雄嶋」は本詩に詠まれた「千松島」の通称であるため、雄島に関する芭蕉の俳文を参照すると、本詩に描かれるような千松島の風景を想像しやすいと考えられる。

注

(1) 藤富史花「江湖詩社詩人の詩文に見る〈窮者而後工〉の受容と理解」『和漢比較文学』第六二号、二〇一九年二月、四九頁。

- (2) 揖斐高「詩人の遊歴」〔江戸の詩壇のジャーナリズム——「五山堂詩話」の世界——〕角川書店、二〇〇一年）九七頁。
- (3) 前掲注(2)に同じ、七八頁。
- (4) 大森林造『大窪詩仏ノート』(梓書房、一九九八年)二七八頁。
- (5) 揖斐高「大窪詩仏年譜」〔市河寛斎 大窪詩仏〕岩波書店、一九九一年）三八七頁。
- (6) 鈴木省三編『仙台叢書』第四卷(仙台叢書刊行会、一九二三年)九七頁。
- (7) 森銃三「菅井梅閑」〔森銃三著作集〕第三卷、中央公論社、一九七一年）四八二頁。
- (8) 鈴木省三編『仙台叢書・別集』第四卷(仙台叢書刊行会、一九二六年)二頁。
- (9) 『松尾芭蕉集』第二卷『新編日本古典文学全集』第七一卷、小学館、一九九七年）九七頁。ただし、一部表記を改めた箇所がある。

(次号につづく)

付記

序文の翻字と訓読について、御批正を賜りました池澤一郎先生に厚く御礼申し上げます。

本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2136の支援を受けたものです。

(おう じきょう・本学大学院博士後期課程)